健康生活と看護学研究　3：14–19（2020）

〔特別報告〕 No. 3　研究報告

看護系大学のコロナ禍における
基礎看護学実習Ⅰの学内実習の実態と教育の質確保に関する検討

篠原幸恵，讃井真理，河野保子，中島紀子，羽藤典子，永江真弓

人間環境大学松山看護学部

（2020年10月21日受理）

【要旨】

【目的】コロナ禍で実施した基礎看護学実習Ⅰの学内実習の取り組みが，教育の質を確保したものであったのか，1年次の実習として学生の成長を促すものであったのかを検討することを目的とした．【方法】対象は学内実習を実施した看護系大学の1年次生の20名であり，無記名式質問紙を用いて調査した．【結果】実習開始時に7割の学生が不安を感じていたが，実習終了時にはほとんどの学生が不安を解消していた．そして，不安を感じなかった者のほうが，看護師の役割や機能を理解できないと回答する傾向にあった．【考察】学生の各種不安については，不安を軽減する働きかけだけでなく，不安を感じない学生への働きかけも実習目標達成に必要であることが示唆された．また，限られた数の教員で場面設定したことで，1年次生にとっては情報処理が行いやすく，混乱なく実習を遂行することができたと考えられ，そのことが，学内で実習する利点であったと推察できた．

キーワード：基礎看護学実習Ⅰ，学内実習，看護教員，看護学生，教育の質

Ⅰ．緒言

新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大を受け，2020年４月７日から，５月25日に宣言が解除されるまでの１か月半の間，日本は，戦後最大の危機といわれた緊急事態宣言下にあった．その間，愛媛県は，感染警戒期，感染縮小期へと移行し，感染予防対策を講じながら，社会経済活動が行われている．このような社会情勢の中，人間環境大学松山看護学部（以下，本学部）では，４月に予定していた入学式等の一連の行事を中止するとともに，４月３日から４月22日まで，学生登校禁止期間とした．その後，教職員，学生ともに遠隔授業への準備期間を経て，５月18日からMicrosoft Teamsを使用した遠隔授業を開始した．そして，６月１日からは対面授業と遠隔授業の同時並行型授業の実施，６月22日から対面授業へと順次移行していった．

こうした状況の中，臨地実習は，臨地状況下において管理者による実習受け入れの判断がなされた．その結果，基礎看護学実習Ⅰにおいては，臨地での実習を４日間から３日間に縮小しての実施を予定した．基礎看護学実習Ⅰは，１年生にとって，初めての臨地実習となるため，学生のもつ最初の看護への関心や動機づけが高まる実習である（水戸と加納，2013）．また，学生は，初めての臨地実習で，どんな看護師なのか，患者とうまく付き合えるのか，自分がうまくできるのか，実習のノルマが達成できるのかという不安とリアルな環境で学ぶことへの期待を持っている（前川ら，2006）．本学部の１年生も，新型コロナウイルス感染が拡大している状況の中，臨地での実習ができるのかという不安と，看護師の役割，機能の実際を体験することへの期待を持ちながら，実習までの期間を過ごしていたのではないかと推察する．

2020年７月，本学部では臨地実習を控え，学生に新型コロナウイルス感染拡大防止対策として，臨地実習前２週間の県内の滞在（県外への移動は禁止）や不特定多数が集まる場所への立入りを禁止し，健康管理をするよう周知し対応していた．しかし，東京都を始め，他の地域でも再び新型コロナウイルス感染の拡大が予想されたことから，実習受け入れ中止との連絡をうけた．文部科学省（2020）は，「新型コロナウイルス感染症の発症に伴う医療関係職種等の各学校，養成所及び養成施設等の対応について」の通達において，実習施設での実習が困難な場合は，学内実習などの実施により，必要な知識及び技能を修得することができるとある．その通達に従い，急遽，学生が基礎看護実習Ⅰの実習目的を達成できるよう，指導案を打ち出し，学内実習を実施することとなった．

本研究は，このような社会情勢の中で行われた，基礎看護学実習Ⅰの学内実習という初めての取り組みが，学生へ

の教育の質を確保したものであったのか，１年次の実習として学生の成長を促すものであったかの検討を試みた．

Ⅱ．研究目的

コロナ禍で実施した基礎看護学実習Ⅰの学内実習の取り組みが，学生への教育の質を確保したものであったのか，１年次の実習として学生の成長を促すものであったかを明らかにする．またそのことから，今後の教育方法の強化と改善に繋がる基礎資料を得ることを目的とした．

Ⅲ．研究方法

１．対象

対象は，基礎看護学実習Ⅰを履修した者のうち，３日間の学内実習を実施した１年次生20名とした．

2. 調査期間・調査方法

2020年８月，実習４日目実習終了時に，対象者全員に，目的等を口頭と書面でわかりやすく説明し，無記名式質問紙を配布した．質問紙の回収は，研究同意を確認の上，その場で個人が特定できないようにし，回収した．

３．調査内容

質問紙は，学内実習に対する不安の有無と，その不安の程度を「かなり不安だった」から「不安はなかった」までの４件法を用いて回答を求めた．また，不安の内容は自由記載で回答を求めた．さらに，不安がある者に，実習を終えて，どの程度，不安が解消されたかを，「すべてのほとんど解消された」から「ほとんど全く解消されていない」までの４件法で問うた．

次に，（1）～（7）の調査項目を４件法で問うた．なお，（7）及び教員の模擬看護師，模擬患者についての感想や基礎看護学実習Ⅰについての全体の感想については自由記載で回答を求めた．

（1）実習目的に対する全体目的達成度
（2）実習目標にそった内容か
（3）医療分野における看護職者の役割の理解度
（4）医療分野における看護の機能の理解度
（5）患者にとっての適切な生活環境への目的達成度
（6）看護職者に求められる基本的な態度の理解度
（7）この４日間を通しての学習満足

４．統計解析

統計処理ソフトは，Excel　2016を用いた（有意水準は5％以下）．実習施設の受け入れ中止に対して，「かなり不安だった」，「少し不安だった」を不安がある群，「あまり不安がなかった」，「不安はなかった」を不安がない群の２群に分け，また調査７項目は，「とても達成できた」，「かなり達成できた」をできた群，「あまり達成できなかった」，「達成できなかった」をできなかった群の２群に分け，Fisherの正確検定を行った（片側検定）．そして，自由記載の内容は，得られたデータを意味ある内容ごとの一文にし，まとめた．

５．倫理的配慮

対象者に，口頭と書面で研究の目的・方法・情報の守秘義務・学会等での公表について説明した．また，研究への参加は任意であり，拒否できることを説明し，それらのことは一切学業成績に影響しないことについても理解してもらってから質問紙を配布した．また，個人が特定されないように回収し，得られたデータは，ID番号で管理し，研究者のみが取り扱い，鍵のかかる保管庫に保管し，管理した．

なお，本研究は，人間環境大学松山看護学部倫理委員会の承認を得て行った．

Ⅳ．結果

本研究は，コロナ禍で実施した基礎看護学実習Ⅰの学内実習の取り組みが，学生への教育の質を確保したものであったのかを明らかにすることを目的としている．以下に，１．対象者の概要，２．学内実習の内容，３．学内実習終了後のアンケート結果について述べる．

なお，自由記載に関しては，紙面上の都合により，掲載していない．

１．対象者の概要

対象者は，学内実習を行った学生20名（回収率100％，有効回答率100％）で，女性16名（18.5±.52），男性４名（19.8±2.87）であった．

2. 学内実習の内容

１）学内実習期間

学内実習期間は，令和２年８月19日～24日の４日間であった．

２）実習時間

実習時間は，８時30分～16時30分であった．

３）実習場所

実習場所は，６階基礎看護学実習室全体を，可能な限り実際の病棟・病室に近づくようにレイアウト（ナースステーション，４人病床の大部屋，検査室の設置）した．なお，カンファレンスなどは，８階の講堂で行った．

４）実習担当教員

実習担当教員は，引率予定だった３名と実習内容に応じて，２名が加わった．

５）実習目的，目標と指導案，実習内容について

実習目的は「保健・医療を受けている患者との関わりの実際を見学し，保健・医療分野における看護職者の役割と機能を学ぶ．また，患者の療養環境を検察し，その環境が

適切なものであるかを学修する」ことであった．実習目標は，①患者との関わりを通して，保健・医療分野における看護職者の役割が理解できる．②患者との関わりを通して，保健・医療分野における看護の機能が理解できる．③患者を取り巻く療養環境を観察し，患者にとって適切な生活環境を理解できる．④看護職者に求められる基本的な態度について述べることができる．以上の４点であった．

実習内容は，初日に病院と病棟のオリエンテーション後に，検温（丁寧で適切な看護師の対応場面）の見学，胃内視鏡検査の送迎に同行，カルテ（模擬）からの情報収集を実施した．２日目は，環境整備の方法説明をし，実施した．また，検温（不適切な看護師の対応場面を加えた）の見学，レントゲンと心電図検査の送迎の同行，採血の見学を実施した．３日目は環境整備の実施と，コミュニケーション，持続点滴の清潔操作，配膳と食事セッティング，食事の介助と口腔ケア，全身清拭と足浴の見学と一部実施，地域連携室の退院支援のかかわりを見学であった．４日目は，実習施設の看護部長の講話１時間程度実施し，記録の整理及び最終面談を行った．

なお，各見学および実施の後は，10分程度のディスカッション，各グループからの発表，教員と各役柄の意見をコメントしながら，実施した．

６）受け持ち患者の設定

受け持ち患者は，実際に実習予定だった病棟の特徴的疾患と経過を設定した．内容を以下に示す．

Ａ氏：76歳，左側変形性膝関節症による人工関節置換術を施行した患者．術後３日目からの受け持ちとした．

Ｂ氏：80歳，女性，右側脳梗塞により，点滴加療をしている患者．発症して，２日目からの受け持ちとした．

Ｃ氏：55歳，労作性狭心症による心臓カテーテル検査目的の患者．検査が２日後に控えての受け持ちとした．

Ｄ氏：70歳，右大腿部頸部骨折による人工骨頭置換術を受けた患者．退院が来週に控えての受け持ちとした．

３．学内実習終了後のアンケート結果について

１）対象学生の不安

急遽変更になった基礎看護学実習Ⅰに対して，不安があると回答した者が15名（75％），不安がないと回答した者５名（25％）であった．不安があると回答した15名の中で，不安の程度が，かなり不安だった者が3名（20％），少し不安だった者12名（80％）であった．不安の内容は，学内実習の内容に関することや実習施設での実習をしている学生との差についての不安を抱えていた．

２）実習目的・目標について

「実習目的の全体目的達成度」について，回答を求めたところ，とても達成できたと回答した者が12名（60％），かなり達成できた者が７名（35％），あまり達成できなかった者１名（５％）であった．次に，「実習目標にそった内容か」については，十分な内容だったと回答した者が10名（50％），まあまあな内容だった者10名（50％）であった．

次は，「医療分野における看護職者の役割の理解度」について回答を求めたところ，十分に理解できた者が8名（40％），まあまあ理解できた者が11名（55％），あまりできなかった者１名（５％）であった．次に，「医療分野における看護の機能の理解度」について回答を求めたところ，十分に理解できた者が７名（35％），まあまあ理解できた者13者（65％）であった．

次は，「患者にとっての適切な生活環境への目的達成度」について回答を求めたところ，とても達成できた者が8名（40％），かなり達成できた者が11名（55％），あまり達成できなかった者１名（５％）であった．次に，「看護職者に求められる基本的な態度の理解度」について回答を求めたところ，十分に理解できた者が13名（65％），まあまあ理解できた者７名（35％）であった．

３）４日間を通しての学習満足度及び不安の解消について

「この４日間を通しての学習満足度」について，回答を求めたところ，かなり満足している者が16名（80％），少し満足している者４名（20％）であった．その満足度の理由については，「授業で学んだ内容と実習が結びついた」など学習内容の満足，充実した内容，自己課題について記載されていた．

実習当初，不安があった者15名に対して，学内実習を終えて，どの程度不安が解消されたか回答を求めたところ，ほとんどが解消された者が10名（66.7％），少し解消された者４名（26.7％），無回答１名（6.7％）であった．

４）教員の模擬看護師，模擬患者についての感想と全体の感想

教員の模擬看護師，模擬患者について，どのような感想を持ったのか，学内実習についての全体の感想や感じたことについて，自由記載で，回答を求め，19名（95％）の回答があり，リアリティある看護師・患者だったという意見や教員の演技に圧倒される意見もあった．

５）不安がある者と不安がない者との比較

実習施設の受け入れが中止となり，「かなり不安だった」，「少し不安だった」を不安がある群，「あまり不安がなかった」，「不安はなかった」を不安がない群の２群に分けた．また調査７項目において，「とても達成できた」，「かなり達成できた」を達成できた群，「あまり達成できなかった」，「達成できなかった」を達成できなかった群の２群に分け，不安との間の傾向をFisherの正確検定で分析した結果，「医療分野における看護職者の役割の理解度」（p=.08），「医療

表１　学内実習の不安の有無における各調査項目の回答人数結果　(N=20)

	不安がある		不安がない		p
	達成できた	達成できなかった	達成できた	達成できなかった	
(1) 実習目的に対する全体目的達成度	10 (50.0%)	5 (25.0%)	2 (10.0%)	3 (15.0%)	.30
(2) 実習目標にそった内容か	6 (30.0%)	9 (45.0%)	1 (5.0%)	4 (20.0%)	.41
(3) 医療分野における看護職の役割の理解度	7 (35.0%)	8 (40.0%)	0 (0.0%)	5 (25.0%)	.08
(4) 医療分野における看護職種の機能の理解度	7 (35.0%)	8 (40.0%)	0 (0.0%)	5 (25.0%)	.08
(5) 患者にとっての適切な生活環境への目的達成度	6 (30.0%)	9 (45.0%)	1 (5.0%)	4 (20.0%)	.40
(6) 看護職者に求められる基本的な態度の理解度	6 (30.0%)	9 (45.0%)	3 (15.0%)	2 (10.0%)	.39
(7) この４日間を通しての学習満足	12 (60.0%)	3 (15.0%)	3 (15.0%)	2 (10.0%)	.36

分野における看護の機能の理解度」(p=.08) において，不安がない者のほうが理解できなかったと回答する傾向にあった（**表１**）.

Ⅴ．考察

本研究の対象は，学内実習で基礎看護学実習Ⅰを行った１年次生であった．オリエンテーション時に学生に，実習施設での実習が中止となったことを伝えると，７割の学生が不安を感じた．不安の内容は，実習の内容に関することや，実習施設での実習をしている学生との差がでることへの不安であった．しかし，学内実習を終え，不安を感じていた者が，どの程度不安を解消できたのか回答を求めると，ほとんどの学生が不安を解消できていた．これは，満足度の自由記載でもあるように，「授業で学んだ内容と実習が結びついた」など，学生にとって，充実したと感じられる実習内容であったことが大きく影響していたと考えられる．

一方で，不安のある者，不安がない者の２群に分けて分析した結果，「医療分野における看護職者の役割の理解度」，「医療分野における看護の機能の理解度」において，不安のない者のほうが，それぞれの理解ができていないと回答する傾向を示した．看護職者の役割と機能は，実際の看護師が実施している療養上の世話，診療の補助の業務をシャドーイングすることで，気づき，学ぶことが出来る．実際に，臨地実習に行くことができないことで，重要な関心ごとである看護職者がどのように活動しているのかについて，実習に行った学生との差を不安に感じて何ら不思議ではない．今回の結果から，逆に不安を感じなかった者のほうが，理解ができないと回答する傾向にあることが示唆されることから，学生の各種の不安は不安を解消する働きかけだけでなく，不安を感じない学生への働きかけも同時に行っていく必要があることを示唆している．

今回，ほとんどの学生が実習目的，目標を達成することができたと回答していた．これは，模擬看護師，模擬患者の感想に示されるように，「実際の病棟の看護師，患者のようで，とても分かりやすく実習をすることができた」，「学内実習でも実際のように看護体験ができて良かった」という意見や「先生たちの演技に圧倒されることもあったが，患者になりきっている先生に対して，ほんとうの患者のように接することができた」など，学生をリアリティある現場に，引き込むことに成功したためと推察する．

また，全体の感想にあるように，「実際に，病院にいったわけでないので，ほんとうの雰囲気はわからないが，まるで，病院で実習を受けたくらいの学びがあった」や「学内実習とは思えないほど充実していてとても学習になった」など，今回の学内実習が，充実したと感じられた学生も多い．学生は，実習中に，患者とその家族，グループメンバー，教員，実習指導者と関わりながらコミュニケーションの大切さや根拠に基づくケアの重要性を学んでいる（村上ら，2013）．そのため，シャドーイングを通し，コミュニケーションの大切さや根拠に基づくケアの重要性も学ぶことができたことが，今回の結果に影響していると考える．

さらに，実習は，複雑で，流動的・偶発的（佐藤ら，2011）であるため，臨機応変な対応が求められ，学生はますます混乱し，強いストレス（加島と樋口，2005）を感じながら実習に取り組んでいる．そして，学生は，知識や技術の不足（村上ら，2013；桝本ら，2013）を自覚し，グループメンバーや教員を支えに（奥井ら，2014）助けを求める一方，未熟さを知られないように隠そうとする特徴があるため（舟島，2013），実習中の悩みや不安なことを相談しない学生も多いと考えられる．しかし，今回，学内実習となり，見学・実施した後は，グループ間で，気づきをディスカッションし，全体で発表するなど学びを深められるような時間を一事象ごとに取ったことや，限られた数の教員との関係で状況がされていたことから，学生が混乱する場面もなく，実習を遂行することができており，そのこと

が，学内実習の利点であったと推察する．

以上のことから，今回の学内実習は，ほとんどの学生が実習目的，目標を達成することができ，学生への教育の質が確保できた内容であったと考える．しかし，準備期間２日間で実施した今回の実習は，学生にとっても，非常事態であり，ある意味で学習意欲が高い状態で実施できたための結果であったと考えられる．２日間で設定した指導案で実施した内容が，どのように影響したのかなど，さらに詳細な分析は，実習時の視覚的媒体を使用し，教員間での評価を行い，学生への教育の質を十分に確保できたかどうかの検討を継続していく必要がある．また，学生が最初に学ぶ看護は，本質的であり，看護師として働きだした後も「自分の看護の拠り所」になることが多い（水戸と加納，2013）．そのことからも，今回，対象である学生が，どのような看護観を持ったのか，今回の学内実習が今後にどのように影響していくか，後に振り返りながら，同時に今後の学生たちの成長も検証していく必要がある．

Ⅵ．結論

本研究は，新型コロナウイルス感染拡大している状況の中，実施した基礎看護学実習Ⅰの学内実習の取り組みは，学生への教育の質を保証したものであったのか，１年次の実習として学生の成長を促すものであったかを明らかにすることを目的とした．その結果，実習開始時に７割の学生が不安を感じていたが，実習終了時にはほとんどの学生が不安を解消していた．今回の学内実習は，学生への教育の質が確保できた内容であったと考える．

そして，不安を感じなかった者のほうが，看護師の役割や機能を理解できないと回答する傾向にあったことから，学生の各種不安については，不安を軽減する働きかけだけでなく，不安を感じない学生への働きかけも実習目標達成に必要であることが示唆された．

また，実習着での演習の授業も未習熟の１年次生にとって，限られた情報環境（人・モノ）の中で，一つ一つの事象ごとにその意味を考えていくことは，この時期の学生にとって重要な意味を持つ可能性があると考えられた．今回は，２日間の準備期間で指導案を考え，実施した．今回の内容を，視覚的媒体を活用し，再度，他の教員の評価も加え，学生への教育の質の確保が十分にできたのか，また今後の学生への影響も加えて検討していく必要がある．

文　献

舟島なをみ（2013）：看護学教育における授業展開 - 質の高い講義・演習・実習の実現に向けて，p173，東京：医学書院．

加島亜由美，樋口マキエ（2005）：臨地実習における看護学生のストレッサーとその対処法，九州看護福祉大学紀要，7（1），5 - 13.

文部科学省（2020）：「新型コロナウイルス感染症の発症に伴う医療関係職種等の各学校，養成所及び養成施設等の対応について」https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/mext_00016.html（参照日:2020.9.3）

前川利枝，大石ふみ子，櫻井しのぶ（2006）：看護学生のはじめての臨地実習に対する思い―フォーカスグループインタビューによる分析―，三重看護学誌，8,131–136.

桝本明子，田邉美津子，中西啓子（2013）：臨地実習中の看護学生への支援内容の検討－実習中の学習と指導の調査から－，川崎医療短期大学紀要，33，9 - 15.

水戸優子，加納佳代子（2013）：「基礎看護学」において初めて看護に接する学生に伝えることとは？，看護教育，54（2），76–82.

村上大介，成田智，長谷川秀隆，塩谷千晶，八嶋和江（2013）：看護学生の臨地実習における学習実態調査―「慢性期看護学（成人）実習Ⅰ」を経験した2年次生の学習状況の実際－，弘前医療福祉大学紀要，4（1），55 - 61.

奥井良子，白水眞理子，間瀬由記（2014）：看護学生の臨地実習におけるレジリエンスの変化と困難および支えの関連，日本看護学教育学会誌，24（1），67 - 77.

佐藤みつ子，宇佐美千恵子，青木康子（2011）：看護教育における授業設計，p100，医学書院：東京．

【付記】　本研究に利益相反は存在しない．

Evaluating on-campus training in basic nursing practice I during the COVID-19 at a Nursing University, and of ensuring the quality of education. Journal of Nursing Science in Human Life, 3: 14–19 (2020). Shinohara Sachie, Sanai Mari, Kawano Yasuko, Nakajima Noriko, Hato Noriko, Nagae Mayumi (Faculty of Nursing Sciences at Matsuyama, University of Human Environments).

Abstract: The purpose of this study was to clarify whether on-campus training in basic nursing practice conducted during the COVID-19 pandemic ensured the quality of education and promoted student growth as a first year of training. The subjects were 20 first-year nursing college students engaged in on-campus training, and surveyed by an anonymous questionnaire. At the beginning of the training, 70% of the students felt anxiousness at the study, but at the end of the training, most of the students had resolved their anxieties. Those who did not feel anxious tended to say that they did not understand the role or function of nurses. This result suggests that in order to achieve practical training goals, it is necessary to reduce anxiety about the various anxieties of students, as well as to reach out to those who do not feel anxiety. In the on-campus training, we spent time in discussions among groups to improve the learning of each event in the course. In addition, setting the scene with limited number of teachers makes it easier for first-year students to conduct their indi-

vidual information processing, and it is thought that the training could be conducted without confusion for the students. This may be assumed to be an advantage for conducting activities on campus.

Keywords: Basic nursing practice I, On-campus training, Nursing teacher, Nursing student, quality of education